概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)
部　会　名	中学校　総則部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

テーマ

『　イキイキと自分たちで学びあう子どもの育成　』

～簡明な発問と指示により探求させる授業づくり～

提案概要

提案校では、「みんなの努力を大事に」という学校教育目標をカリキュラム・マネジメントの視点に基づき具現化するためのグランドデザインを描く上で、2019年～2021年に研究指定校に当たったこともあり、学校運営の努力点として「居場所のある授業づくり、人間関係づくりの基礎となる授業づくり」を重点課題として校内研究を通して取り組んできた。

研究テーマである「イキイキと自分たちで学びあう子どもの育成」の設定理由としては、「伸ばしたい力・つけたい力＝探求する力である。」という構想から、「学ぶ意欲を高める授業づくり」というテーマからスタートしたが、教員主体ではなく、「生徒が」主体的・対話的に学ぶというコンセプトを大切にするために「イキイキと自分たちで学びあう子どもの育成」に変化した経緯がある。

「実践の概要」

１．組織づくり

提案校では、研究推進委員会を拡大した拡大推進委員会を開くことによって組織全体として「生徒の強み、弱みを教員間で把握」することができた。それに伴い、課題を明確に共有することができ、研究テーマ（研究主題）の設定につながったと感じている。

２．研究のPDCAサイクル

提案校において、教務主任との連携によりPDCAサイクルが確立でき、時間を効率的に生み出したり、教員の負担を軽減したりするなど継続できるものにしていくこともポイントだった。

Plan・・・・仮説の設定
Do　・・・・どのように進めていくか
　　企画・時間割の設定・研究授業等
　　環境づくり
　　教科ごとのアプローチ、教科会の設定
Check・・・ 生徒の様子（アンケート）
　　スーパーバイザーによる助言
　　教員の振り返り
Action・・・実践・振り返り

３．授業構成について

① 本時の目標を明確に提示する。

提案校では、「Question と question」・「Answer と answer」というように問いから答えまでを、大文字=大きな問いかけ　小文字=小さな問いかけのように大きなステップと小さなステップを設定し、小さなステップを生徒主体で進めることにより理解を深めることを実践した。ねらいとするAnswerに到達すれば、本時の目標を達成できた姿になる。

② 市松模様による座席配置の設定
「誰とでも対話ができて、お互いを認め合える」日常的な学習集団を形成する手段として座席を配置した。

③ 「あたたかな聴き方」の実現
相手の話をしっかり聴くことを意識できるよう、各教室に「あたたかな聴き方」ができているか、自分自身でできているかを確認するシートを設置した。

４．研究を通しての成果と課題（振り返りや授業アンケートなどのフィルターを通して）

（成果として）

・対話的な活動を進めることで、「自分から進んで授業に取り組めた」と感じている生徒が確実に増えた。
・「聴く」意識が高まることで、人間関係の構築など様々な面で効果があり、互いに認め合える学習集団が作りやすくなった。

⇒『組織的な取組みが、生徒・保護者へ前向きに伝わっていることを実感している』

（課題として）

・授業の目標をより明確に提示することがあげられる。

質疑応答

Ｑ：授業実践においての大文字Questionと大文字Answerについて、入口と出口の具体例を数学科の視点で具体例を教えて欲しい。

Ａ：３年生における、数学の授業例で説明をおこなった。

協議の柱及び協議概要

協議の柱を、「各校における学校教育目標を具現化するためのカリキュラム・マネジメントの工夫や実践について」に絞り、４人グループで協議を行った。協議後、各フロアの１グループずつ各校の取組や工夫等の発表を行った。

＜主な取組・工夫＞

・グランドデザイン（学校全体～教科）を作ることによって学校教育目標を達成したい
・時間割の工夫として、教科部会を組み込んだりしていきたい
・時数の生み出し方として、夏休みの活用等をしている（総合的な学習の時間として）
・学校評価アンケートの回数の工夫（教員に２回行っている。生徒・保護者アンケートは年度末ではなく12月にとることにより、年度中に振り返ることができる）

まとめ概要

カリキュラム・マネジメントは新しいことをやることではなく、組織的・計画的に取り組むことが大切である。そして、地域の実態や子どもたちの実態を把握し効果を得やすいポイントを絞っていくことを心がけながら、全ての職員が参加する営みとして取り組んでいくことが大切である。管理職中心ではなく「みんなで」を意識していくことが重要だと考える。

また、学習指導要領における「総則」を教員それぞれが読み返すことにより理解が深まり、なぜ求められているのかをもう一度考え、取り組むことが大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　国語部会

神奈川県研究主題

『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』

テーマ

学習プランを用いた主体的な学びの充実をめざして
～ICTを活用した効果的な意見交換を通して～

提案概要

【具体的な提案内容】

扱った単元は、光村図書１学年「話題や展開を捉えて話合おう　グループディスカッションをする」「話題や展開を捉えながら話合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること」をねらいとして、グループディスカッションを行った。

本実践前の５月に「思い出の○○でスピーチする」、９月に「ビブリオバトル」などの〔A 話すこと・聞くこと〕の指導事項をねらいとした単元を通して、自分の考えをまとめて一対複数という形で他者に話をする経験を積んできた。しかし、感染症予防の観点から活動が制限されていたため、各教科の授業や学級活動等で複数人と話合い、互いの考えを結び付けて合意形成を図る経験はあまり積めていなかった。そこで、本実践ではグループディスカッションを設定し、① 学習プランの活用と② ICTの活用を軸に主体的な学びの充実をめざした。

話合いのテーマとしては、教科書で提示されているものではなく、「SDGs」に設定した。同時期に社会科で学習しており、様々な課題や取組があり思考の広がりや深まりが期待できるためである。

① 学習プランの活用

学習プランを用いて、単元の授業内容の流れや指導事項を生徒と共有し、見通しをもたせた学習の実現を図った。単元途中と単元終末のタイミングで振り返りを記入する欄が設けてある学習プランを活用した。学習プランは、本単元だけではなく、年間を通して活用した。

〈成果と課題〉

・単元を通して身に付けたい力を生徒と共有することで目標が明確になり見通しをもって学習活動に取り組む様子が見られた。自分自身や班の活動状況を把握し、以降の活動に生かす工夫が見られた。
・学習プランにある単元途中の振り返りは生徒が自分自身の学習をメタ認知することにつながった。
・生徒が見通しをもって学習に取組み、単元終末の振り返りではこれからの生活に生かそうとする記述が見られた。
・単元を通して身に付けたい力（指導事項）を記載する際、生徒が理解しやすいように学習指導要領の言葉を変更したが、理解が不十分な生徒も見られた。

② ICTの活用

グループディスカッションのイメージを持つためにNHKforスクールの動画を活用した。クロームブックを活用し、ジャムボード上に記録を残した。他校の生徒とオンライン上でグループディスカッションの報告を行った。

〈成果と課題〉

・NHKforスクールの動画を活用したことで生徒と共通のイメージを持つことができた。
・ジャムボードを活用したことで班の意見を効率的にまとめることができ、発言が苦手な生徒も意見を出すことができた。また、加筆、修正などの編集も容易であり、生徒にとって使いやすいものであった。
・他校の生徒とオンラインで報告する場を設けたことで生徒の興味・関心を高めることができ、質の高い報告をめざしたいという生徒の意欲を高めることにつながった。
・調べ学習の進行状況を把握して声掛けをしていったが、すべての生徒の状況を把握することは難し

かった。調べ学習の際は調べる基準をある程度設けたほうがよかった。

質疑応答

（協議の時間を確保したため、質疑はなし。）

協議の柱及び協議概要

【協議の柱①　グループディスカッションの評価について】

・各班でグループディスカッションをした場合、同時に全員のパフォーマンスを見取るのは難しい。
・ディスカッションの内容を音声入力で記録させる方法がある。
・動画を撮れば後日評価できるが、教師の負担は増してしまう。
・ワークシートの文章で見取るのが一般的であるが、文章を書くことが得意な生徒は評価が高くなる傾向があるのではないか。
・班員の役割を明確にすることで評価しやすくなる。
・話の流れを記入させておき、発言に対してどのような意見を言ったのかを記録させておく。

【協議の柱②　グループディスカッションで国語の力を高めるためのよりよいテーマ設定について】

・意見が分かれるようなテーマや、様々な答えが挙がるテーマがよい。
・SDGsなどの生徒にとって身近な題材をテーマにした方が活発な話合いになる。
・SDGsなどは生徒の知識に差が出てしまい、評価する際に国語の力を見取れないのではないか。

【小中合同協議　小で学ばせておいてほしいこと／小の学びを受けて中で学ばせてほしいこと】

・小中ともに９年間の学びを意識した授業実践が必要である。
・子どもの特性を活かすためにも、ICTの活用は小中ともに進める必要がある。
・小学校のうちに教科書の内容を理解できる程度の読解力を身に付けておいてほしい。

まとめ概要　**（助言者、部会総括者より）**

【① 学習プランについて】

生徒と教師が見通しを共有していくものとして「学習プラン」を活用した。単元を通して身に付けたいことの軸がぶれず、自己の振り返りにもつながった。

中学校では、学習プランを活用し、評価まで見据えて学習計画を立てているところがある。小学校でも、高学年ぐらいから学習プランを活用し、評価をより意識して児童と学習目標を共有していくとよいのではないか。また、小学校の学びを中学校の学びにしっかりつなげていく必要がある。

【② ICTの活用について】

ICTを活用することで記録の蓄積が容易になった。グループ活動の様子を写真や動画で記録することもでき、生徒のよりよい学びにつながり、その評価を行う際に効果的だった。

【③ 教科内容の横断的視点】

今回の実践では、生徒それぞれの知識に差が出てしまい、話合いが十分に深まらないという課題が見られたが、学習内容を関連付けて横断的に学習することは、主体的な学びを促す重要な視点であり、カリキュラム・マネジメントに通じるものである。教科に限らず、学校行事などと結び付けた学習も横断的な学習となりうるので、小学校でも中学校でも生かせる場を検討してほしい。

小学校の実践も中学校の実践も子どもが意欲的に学ぶことを考えた実践だった。主体的に学習に取り組む態度の育成では自分自身の学習を調整する力が求められている。その力を身に付けさせるためには子どもに見通しをもって学習させることが大事である。今後も子どもが主体的に学べる環境を作り、日々の実践を行ってほしい。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　社会科部会

神奈川県研究主題

「資質・能力の育成のための学習評価の充実（指導と評価の一体化）」

テーマ

『「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫』

一人ひとりが自身のテーマについて、見通しをもって調べ追求する学習を例に

提案概要

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は単元が終わった後の振り返りを中心に行うことが多かったが、発表までの過程を見取ることにより、これまで見えなかった部分を確認することができた。

今回は、「身近な地域の調査」の単元を取り上げ、自身でテーマを設定して調べ上げ、それを発表するまでを１つの単元とした。

「主体的に学習に取り組む態度」として、「粘り強い取組を行おうとする」側面と「自らの学習を調整しようとする」側面の２つから、評価においては、「地域調査の手法において、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追求しようとしている」とした。

実践上の工夫としては、① 自分の関心があるテーマを各自で考えさせたこと。② 「答えのありか」を教えるのではなく、方法を紹介することにより、生徒自身が自力で学習を進められるようにしたこと。③ 調べるテーマの妥当性を５つの項目から確認することにより、早い時期から見通しをもてるよう取り組ませたこと。④ 総括に使う評価に使用する「振り返りシート」は、５つの妥当性の項目について数字で記入し比較する作業をしてから文章記述するようにしたこと。⑤ ロイロノートの「提出箱」を利用したことにより個別に生徒を励まし、課題意識や困り感にそった働きかけを行うこと。以上の５点を意識して授業を展開した。

この単元を行う中で改めて気づいたことは、① 身近な地域（学区）を調べるはずだったのに藤沢調べになってしまったこと。② テーマを設定するためのキーワードは出てくるが、そこから具体化することが難しいこと。③ 検索のスキルが乏しいため、テーマに沿った資料が中々見つからなかったこと。④ 検索して調べた言葉を使用していたことに加えて、わからない語句、読めない語句を調べず、そのまま使っていたため、発表において躓いたり、間違いが生じたりしていたこと。⑤ 生徒自身が比較対象や基準を設けていないため、物事の判断基準が主観的になってしまったこと。以上の５点が課題であった。しかし、生徒の課題や躓きを知ることで、授業の取組の様子やロイロノートに記録された個別の学習状況から、教師側が全体や個別に働きかけができたことにより、その都度最適な指導の方法を考えて改善に役立てることができた。

具体的な例として２人の生徒を挙げて授業の様子や評価の見取りの話をした。１人目のＡさんは、単元の最初の方の授業を休んでいたが、自身のメモ書きに見通しをもった内容の記述があり、発表につなげることができた。本人の自己評価では、５つの妥当性の項目で評価が低くなってしまうものもあったが、教師から見るとＡさんは、自身の取組内容について、分析的に振り返ることができていた。Ｂさんについては、自己表現をあまり上手くできない面が見られるが、毎回のロイロノートの提出などで、調べることへの向き合い方などを教師が知ることができた。また、５つの妥当性の項目で良いものもあれば、良くなかった自己評価が見られ、振り返りシートについても、２つの質問で「上手くいった」と、「上手にまとめられなかった。」という一見すると矛盾した内容が記載されていた。しかし、授業の過程を見守っていたことにより、「上手くできたまとめ」が自分で資料をまとめたものであること、「上手くできなかったまとめ」が結論のことであるということを教師が理解できた。さらに、授業ごとに進捗状況を把握していたので、どのような考え方で作業に取り組んでいたのかが見取れたため、総括のための評価を出す際の参考とすることができた点が非常に良かった。

質疑応答

質問①　ＡさんとＢさんの実際の評価　　質問② 振り返りを上手く書けない生徒の評価

質問③　同じテーマだと内容が被らないか　　質問④ アドバイスをすると教師の作品にならないか

解答①　Ａさんは、粘り強さと分析力（自己分析）から考えてＡ評価とした。しかし、Ｂさんは記述内容のみで見ればＣ評価をつける振り返り内容であったが、これまでの工夫や取組など、文章にはない部分が見取れたためにＣ評価とはしなかった。

解答②　どのように取り組んでいるかという経過が分かるため、振り返りを書くことが難しくても評価をすることはできる。しかし、単元の内容によるものも大きいので、今後も評価の見取り方について考えていくことが必要である。

解答③　初めて取り組んだ学習内容であったため、ある程度似てしまう部分があっても仕方がないと割り切って行った。

解答④　同じテーマの生徒を集めて問いかけながらアドバイスを行った。こちらから指示を出したわけではなく、考えを膨らませるためのアドバイスを行い、それを参考に生徒が調査内容を考えていった。

協議の柱及び協議概要

指導と評価の一体化について～指導に生かす評価の手立て・記録に残す評価の手立て～

① 授業内評価の検討、主体的に学習に取り組む態度がどの学校でも同じような評価ができるような平等性、それを行ったうえでの働き方改革の実現を目指すこと。それを考えた上で、良い授業を展開すれば、児童・生徒もちゃんと授業をやると思う。やはり、授業改善が必要だと思う。

② 具体的な指導に生かす評価は改善できるものであり、単元を貫く問いとして、自分で目標をもつことや、何が良かったか（何が足りなかったか）を考えて次の単元に生かすことが必要ではないか。また、目当てを考えさせることや子どもたちの変容を見取ることも必要である。

③ 単元が終わった時に振り返りを行うが、単元の最初に子どもに対して「えっ？なに？」と思わせるところからどのようなアプローチができるかが大切ではないか。発問に対して児童・生徒がどのような疑問をもつか。つまり、教師側がどのような発問を行うことができるかで、やる気や興味が変化するのではないか。

以上、３つのグループが発表した内容である。共通しているのは、教師が見通しをもった単元計画を立てるとともに、どのような発問や導入を考えるか。興味をもてば、自然と自ら主体的に学習に向かうということであった。

まとめ概要

現行の学習指導要領が本格的に実施され、「主体的・対話的で深い学び」がうたわれてきた中、新型コロナウィルスの感染予防対策などで、現中学３年生は入学から様々な制限がある中で学習活動を行ってきた。グループワークやペアワークの制限などがある中、「できない」をどのように「できる取組」へ変えていくか。１人１台の端末は、児童・生徒が単元目標を達成するためのひとつのツールでもあるが、具体的な評価を行う日頃の行動観察のためにも使うことができる。毎時間の授業では難しいため、児童・生徒と教師が、お互いに好きなタイミングで見られるようにすることにより、生徒たち自身で学習改善を図ることができたり、適切なタイミングで教師による助言を行うことができた。また、評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を、単元や題材などの内容のまとまりの中で設けたりするなど、「主体的　・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る中で、適切に評価をすることができるのではないか。さらに、生徒の状況に応じて指導を入れ学習改善につなげていくことや、分野や単元によって評価の手立てについて工夫していくことが大切である。

評価とは「教師の授業改善」と「児童・生徒の学習改善」に繋げるものであるため教師のみではなく、児童・生徒が主体になるように授業、単元計画に工夫を凝らし、学習評価を追求していく必要がある。

概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)
部　会　名	中学校　数学部会

神奈川県研究主題

『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』

テーマ

『将来につながる数学的活動の探究』

提案概要

入学当初から算数・数学に対して否定的な感情（嫌い、将来役に立たない）をもつ生徒が多かったため、「数学を学んで、将来につなげてほしい」という思いで、授業を実践しようと考えた。

手立てとして単元の学びを通して、「何ができるようになるのか」という視点を大切に将来につながる数学的活動を、年間を通して取り組んだ。本提案ではその中の１つとして「データの分析と活用」から授業実践の報告をした。そこでは、①「日常生活にある課題をみつけて解決策を考える」②「必要なデータを調査（アンケート等）して集める」③「その資料を整理する」④「整理した資料を考察する」⑤「まとめ・発表を行う」⑥「振り返り」といった流れで授業実践した様子を、実際の映像を交えて報告した。映像では、「データを分析し、まとめる場面」、「発表する場面」、「質疑・応答の場面」の３つの場面が紹介され、生徒が主体的に学習に取り組み、学びを深めている様子が見られた。学習の振り返りにおける生徒のワークシートの記述では、実際に「主体的に学習に取り組む態度」としてどのように評価規準を設け、評価しているか生徒の実際の記述をもとに説明した。

本実践の成果として、アンケート結果において、実践を行う前と比べて「数学は将来に役に立つと思いますか」、「数学は日常生活に大きく関わっていると感じますか」のそれぞれの質問で肯定的な回答の割合が上昇した。また、年間を通して、自らの考えを発表する活動に力を入れていたことから、相手にわかりやすく物事を伝える力もこれらの活動を通して成長したと感じられた。またICTの活用についても、回数を重ねるごとに分かりやすくプレゼンテーションをまとめる力が身に付いたと感じられた。

一方、課題としては、発表に対する質問の内容が、数学的な本質に迫るものでなかったり、根拠がなかったりする場面があり、論理的な思考が身に付いていないと感じるところがあった。今後、数学的活動の更なる充実を図り、発表者だけでなく、質問する側の学びの質の向上に努めていくことが必要だと感じた。

質疑応答

今回の提案に対する質疑はなかった。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱①】「授業につながる数学的活動について、どのような取組をしているか。」

この活動が将来につながるのかという疑問点をもちながらも、具体的な事象をもとに数学的活動を取り入れた授業を行っているという意見や、数学的活動を通して、数学的な見方・考え方を働かせながら学習することで、将来役に立つ資質・能力の育成につながるのではないかという意見が出た。

【協議の柱②】「主体的に学習に取り組む態度の評価について、振り返りを書かせて評価する際に、文章が書けない生徒に対してどのように見取るか。また、Ａ規準をどのように設定しているか。」

（書けない生徒への対応として）

ワークシートの質問項目を書きやすくすること、グループで協議をして意見をまとめること、書ける

ように継続した指導を行っていくこと、口頭で説明させるなど別の方法で見取ること、箇条書きでもよいなどその生徒にあった対応をとることなどの意見が出た。

（評価規準については）
「個数を指定してそれ以上書けていればA」、「B規準を提示して＋αのことが書けていればA」、「A評価の例を提示して、その内容を目指させる。また再提出も可」、「Aの姿は多様であるため、評価規準は示さない」などの意見が出た。
話し合いの様子から、振り返りなどの記述について、多くの先生が評価規準をどのようにしたらよいか悩んでいるように感じた。

２つの協議の柱を通して、再度今回の提案を振り返りながら、数学的活動や、記述内容における評価規準の在り方について考える時間となった。

まとめ概要

本提案では、提案者の思いから、生徒の主体性を見取る授業実践の一例が紹介された。実際に実践された授業を参観してみると「自ら課題に向かい、取り組む生徒の様子」が見られた。それは提案者が「数学を学んで、将来につなげてほしい」という思いから、日常の事象や社会の事象から問題を見い出し、数学の舞台に乗せて問題解決する、また、その過程で数学的な表現を用いて説明し伝え合うといった数学的活動を取り入れた授業を、年間を通して計画的に行ってきた成果だと推察できる。さらに、生徒の身近な課題（疑問）と数学を結びつけ、生徒自身に調べたいことを決めさせるなどの工夫が、生徒の主体性を引き出すことにつながったと考えられる。生徒の振り返りを見ても、数学での学習を学校生活に活かそうとする記述が見られたのは大きな成果である。
「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、令和６年度の公立高等学校入学者選抜の選考に活用されることとなった。その中で、多くの先生方がその評価方法等について不安を覚えている。今後、「主体的に学習に取り組む態度」の観点を、挙手の回数や、提出物の提出状況等で評価するのではなく、生徒が学習を調整しようとする姿や日常生活に結びつけて考えようとする姿、粘り強く取り組む姿などを日々の授業の中で計画的に見取っていくこと、また、多様な方法で評価していくことが大切であると感じられた実践及び協議であった。

概　要　報　告

実 施 期 日	８月３日（水）
部　会　名	中学校　理科部会

神奈川県研究主題

資質・能力の育成のための学習評価の充実（指導と評価の一体化）

テーマ

『KWL シート活用と成長の実感を伴った学習の振り返り』

提案概要

学習指導要領の目標及び内容が資質・能力の３つの柱で再整理されたことを踏まえ、各教科における観点別学習状況の評価の観点についても「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点に整理された。特に、「主体的に学習に取り組む態度」については、生徒の粘り強い取組を行おうとする側面、自らの学習を調整しようとする側面を見ていかなければならない。この観点の評価方法として、生徒が記載した各単元や章の振り返りを評価する方法がある。しかし、評価をすることが目的となってしまい、生徒の学習改善に繋がっていくのかと疑問を持った。本提案では、生徒自身が成長を実感できるような学習の振り返りシート（KWL シート）を作成し、実践した。

（１）KWL シートの概要について

このシートのモデルとなっているのは、KWL チャートという Ogle（1986）が提案した学習者の問いを活かした学習指導法である。それを１枚のシートとして使用し、中学生向けに作りかえているため、KWL シートと呼ぶこととしている。

Ｋ（知っていること）：教材や単元に関して既に知っていることを記載する。

Ｗ（知りたいこと）：教材や単元を通して知りたいと思うことを記載する。

Ｌ（学んだこと）：教材や単元を通して学んだことを記載する。

（２）KWL シートの特徴について

単元や章を学習する前に「Ｋ・Ｗ・Ｌ」の部分を記載し、学習後に新たに「Ｋ・Ｗ・Ｌ」の部分を記載する。学習後の「Ｋ・Ｗ・Ｌ」に関しては、日々の学習で振り返りを行う時間を設けており、その用紙に書いた内容を参考にして記載することにしている。このことによって、各単元や章の振り返りだけを行う場合とは異なり、学習前と後の学びの変化がわかる。また、生徒自身が単元や章の中でのつながりや関連性に気づくことができ、より効果的な学習の振り返りを行うことができるのではないかと考えた。さらに、その単元や章の学習を進める中で、知りたいと思ったことから実際に探求したことをまとめて記載できる欄を設け、生徒自身が知りたいと思い、日々探求してきたことを振り返ることができるようにした。

（３）成果と課題について

実施後のアンケートの結果、「授業の振り返りが自分にとってプラスになっていた」と感じる生徒が増えていた。また、「今後の振り返りについて自分で選べるとしたら、どれがよいか」というアンケートにも、約７割の生徒が「振り返りシートと KWL シートの両方をやった方が良い」と答えた。

さらに、生徒の感想にも、「振り返りシートだけでは頭に残らないので、（KWL シートは）意味がある」「単元のすべてが終わったときに KWL シートをやることによって全体を振り返ることが

できる」「全然説明できなかった自分が、多くのことを説明できるようになっている」という内容があり、KWL シートの活用が「生徒自身が成長を実感できる」ような結果につながったことは大きな成果だった。

一方、具体的な評価方法としては課題が残った。明確な基準設定が難しく、複数名の教員が評価したときに差が出ないよう、ルーブリック表などを作成し、評価基準を明確化する必要性を感じた。

質疑応答

Ｑ KWL シートのバージョンが何回か変わっているのはなぜか？

Ａ 生徒自身が自分の成長を実感できるように、これまでも KWL シートは改良しながら実践してきた。例えば今回、途中経過の欄を設けたが、生徒がなかなかうまく書くことができなかったため、その欄をなくした。また、「Ｋ（知っていること）」と「Ｌ（学んだこと）」を昨年度は別にしていたが、生徒にとってこの２つを区別することは難しいと感じた。そのため、現在は「Ｋ・Ｌ」を同項目として扱っており、今後も生徒の様子を見ながら、KWL シートは適宜変更していきたい。

協議の柱及び協議概要

協議の柱「主体的の評価について各学校で取り組んでいる評価項目の共有・今後の検討」

協議概要

○「面白かった」など端的な振り返りのみを書く児童が多くいるので、今回の提案は参考になった。理科だけではなく、他教科にも応用して KWL シートの使用を検討していきたい。（小学校）

○ 小学校３～４年生にも簡易的な KWL シートを作成し、使用を検討していきたい。どのように応用できるか考えたときに、文章で表現することは難しいので、絵や図で表現をさせるのはいいのではないかと感じた。（小学校）

○ KWL シートはよくできているが、同学年に複数の教員が授業を持っている場合、評価基準を明確にしなければならない。（中学校）

○ 評価をするための振り返りにするのではなく、生徒が「こんな知識が得られた」などを実感できるシートになっていると感じたので、取り入れていきたい。（中学校）

まとめ概要

指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点をもたなければならない。特に、「主体的な学習に取り組む態度」については３観点の中で最も重要な位置づけとなるのではないだろうか。その中で、評価のための振り返りとなってしまっては、児童生徒の学習改善にはつながっていかない。また、児童生徒だけではなく、教員の指導改善にもつながっていかない。質疑応答にもあるように、提案者は生徒の様子を見ながら必要性・妥当性を考慮しつつ、試行錯誤しながら KWL シートを何度も変更をしている。

また、約７割の生徒が「振り返りと KWL シートの両方をやった方が良い」という回答であったことからも、振り返りだけを行うのではなく、KWL シートを取り入れることにより、生徒自身がより成長を実感できるようになったことがわかる実践だったと振り返る。

学習評価が児童生徒のよりよい学びにつながるためには、教師の授業改善が欠かせない。主体的に学習に取り組む態度の評価方法を検討するとともに、その評価を生かし、主体的に取り組むことのできる授業づくりに取り組み続けていくことが大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)
部　会　名	中学校　音楽部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『より豊かな音楽表現の実現を考える～指揮をしてみよう～歌唱表現に生かすために』

提案概要

・主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善について
・コロナ禍でどのように表現を学ぶか、生徒の意識の変容、経年経過をみる
・「表現活動」の工夫を考える
＜「花」の題材から考える＞
① 授業でDVDを使い指揮法を学ぶ
② 「花」にふさわしい表現（強弱やフェルマータなど）を考える
③ ワークシートに記入する
④ 音楽と共に指揮をする
ICTを使用し生徒同士で撮影する、指揮だけでなく指揮と歌唱を結びつけて「表現を深める」授業実践の報告

質疑応答

・５時間という短い時間の中で、指揮と歌唱の評価をどのように行っているのか。
→評価を行うのは歌唱だけで、指揮は評価に入れていない。指揮は合唱大会など表現を深めるために行っているので、今後生かされる。

協議の柱及び協議概要

◎ 各観点の評価の妥当性について考える
※ グーグルのアンケートを使用し、その場で集計を行った。
・指揮法を授業で扱っていない教員も多かった。授業の指揮の技術に不安を持っている、評価についてどうすればよいか悩んでいるなどの意見があった。
・各観点の評価の規準が難しく、教員の主観になってしまっているという意見もあった。
◎ コロナ禍での音楽の授業における工夫について
〇ICTを活用した授業作りについて協議した
・板書の時間が短縮できる
・生徒同士で動画撮影をして、合唱のパート練習などに生かしている
・気になったことをインターネットですぐに調べることができる
・WEBのアプリを使用して創作している
・タブレットに入っているアプリ（ガレッジバンド）を使って創作をしている
以上のようにとても便利に使用している教員が多かった。
一方で、以下のような意見もあった。
・生徒が使用するタブレットを家庭に持ち帰らせているかどうかについて、市町で統一性がない
・動画撮影をすることで管理が難しいところがある
など、課題が多いと感じる教員も多くいた。

まとめ概要

「久しぶりに他市の先生方と活発な意見交換ができ、とても勉強になった。」、「自分の授業に取り入

れたいと考えた。」などの声が上がっていた。
〇助言の指導主事から
生徒につけさせたい力は何か、そのために何をするのか、何を使うかを明確にする必要性を感じた。
この７市町が集まる教育課程研究会の目的を考え、協議した内容を子どもたちに返していくことが重要である。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　美術部会

神奈川県研究主題

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」

テーマ

『表現の多様性を生かし、主体性と対話を引き出すための題材の工夫』

提案概要

○授業には関心はあるが不安や自信のない生徒に対してのアプローチ

① 楽しく知識・技能、思考・判断を身につけさせること

② ICT や振り返りノートで制作プロセスを振り返りながら、価値や面白さに気付き、美術を愛好するところにつなげる

実践題材名　「場面を描く」

＊できるようになること＊

遠近法の理解・絵の具や筆の性質の理解、テーマを設定し想定した場面を描くこと

過去に行っていた授業では一点透視図法のみに方法を絞って指導することで生徒の理解がしやすいと考えて指導していたが、どれも似たような作品が多くなってしまった。

そこで今回は遠近法を使用するが一点・二点・三点・空気遠近法などの技法を限定することなく、自分が表したいと思う方法を選択して空間を表現するよう指導した。結果的に様々な作品が生まれ、生徒の表したいものをそれぞれ表現する中で技法を活用することができた。中には社会問題や空想世界など自分なりに場面を設定し、それらにあった空間表現を選んだり、絵筆の技法などを選んだりと工夫しながら制作する姿があった。

ゴールを広く設定することで生徒が様々なプロセスを通して作品を制作したり、それらをまた深めたりする中で対話が生まれるということが可能になったと感じる。

質疑応答

Q：評価評定をする際に生徒にどのようなアプローチをしているか。

A：できるようになることができていればB基準であるということを伝えている。A、A゜というところをどのように公平性をもって評価していけばよいのか。
なんとか基準に達しているものがB、自分のこだわりをもって表現したものがA以上というふうに伝えている。

協議の柱及び協議概要

「苦手意識をもっている生徒が主体的に取り組める仕掛けについて」

・苦手な生徒ほど題材の方向性が示されている方がよい。自由が辛い子が多い。

・生徒同士で制作過程を見合ってアドバイスしたり、いいところを言い合ったりする。

・場の設定で、「制作するんだ」という意識が高まる。（美術室に行くということで）

・材料の用意は最低限準備できる物で取り組ませるとより自分らしさを発揮できる。

・キットの用意は簡単に取り組めてよいが同じような物になりがち。

・目的意識をもって作品に取り組ませると発想が膨らむ。

「ICTの活用について」
・作品をデータとして保管することで生徒がまとめの際に振り返ったり、教師が評価に活用したりすることができる。
・プロジェクターを利用して、参考作品や道具の扱い方、授業の流れを見せるのは効率的。ただし、個人情報や著作権に留意しなければならない。
・画像検索はイメージを膨らませるのに役に立つが、そのまま自分のアイデアにならないように注意しなければならない。また、調べることで個性や工夫が失われてしまいかねないので、つくりたい物を決めてから調べるなどの工夫が必要になってくる。

まとめ概要

１．題材の工夫
技法の習得だけでなく、技法を活用しながら作品をつくること。技法の表現だけでなく、テーマへの思いも大事にするとよい。

２．教え方の工夫
学びのプランを授業前に提示し、見通しをもって授業に取り組ませる。
個人制作→ 中間支援→ 共有→ 振り返りという流れを繰り返して、表現したい物をつくり上げていく。
ICT 機器やロイロノートを活用しながら共有を行うことで、苦手な生徒にもヒントになる。
主体的に試行錯誤したことをノートに記載して記録を残すことで、振り返りや評価へつなげることができ、先生やクラスの人との対話、主体的に行ったことをここで確認することができる。

３．長期での成長を見据えた指導計画
知識・技能の蓄積から表したいものを自由に表現することができるように計画的に指導していくことが必要である。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　技術・家庭部会（技術分野）

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『Chromebookを活用した,構想と設計と具現化,製作過程や結果の評価,改善及び修正』

提案概要

技術分野で育成することを目指す資質・能力は，単に何かをつくるという活動ではなく，例えば，技術に関する原理や法則，基礎的な技術の仕組みを理解した上で，生活や社会の中から技術に関わる問題を見いだして課題を設定し，　解決方策が最適なものとなるよう設計・計画し，製作・制作を行い，その結果や過程を評価・改善し，さらにこれらの経験を基に，今後の社会における技術の在り方について考えるといった学習過程を経ることで効果的に育成できると示されている。

本題材は，生活や社会の中から見いだした問題を材料と加工の技術によって解決する活動を通して，材料と加工の技術の見方・考え方を働かせて，問題を見いだして課題を設定し解決する力を育成するとともに，製作に必要な図をかき，安全・適切な製作や検査・点検等ができるようにすることをねらいとしている。一人に一台，端末が配布されたことにより，CADを使用して設計への抵抗感を軽減し，取り組んでいこうとする生徒が増えるのではないかと考えている。

「実践の概要」

Chromebookを活用し「Onshape」を使用した製図を行った。紙の製図より正確で簡単な設計図を作成することができるようになった。生徒のアンケートは「これまでに設計図を書いたことがあるか」の質問に対して「ある49％」「ない51％」という生徒も，Chromebookでの製図を終えた後，「製図をすることは難しいか」の質問に対して，「思う71.4％」「思わない28.6％」という結果になったが，設計図が完成しない生徒は０人だった。また，切削や切断，組み立ての作業がスムーズで，結果的に設計から製作までの授業数も減らすことができた。

CADソフトは，とても単純で，誰もが分かりやすく取り組めるということがとても大きな利点である。そして以前と比較して製図の際に手が止まる生徒が出ず，意欲的に取り組む姿がとても多く見られたので「どんな生徒でも自身の思いを形にできる」と感じた。

PC操作に全く慣れていなかった生徒も非常に多い中，この題材を学習し，設計方法（操作方法）の基礎をある程度学べば，そこから先は，各自で設定したそれぞれの課題を解決するために，積極的に取り組むようになったことが，生徒が一番変化したところである。

自分自身もこの授業を通して，改めて技術分野の楽しさ，そして重要さを感じることができた。今回の実践授業では，このソフトの活用がサブテーマとして挙げていたテーマを解決する意欲を高めることにつながった。一つの作品に対して何度も設計し，修正を繰り返すことが，時間の都合でできなかったり，ソフトの仕様で，製図の記録が上書きされるため，変容を見とることが難しいなどの課題はあるものの，これからも端末を利用し，他の分野においても応用していくことが大切である。

質疑応答

・切断されている教材を使用する上で，気を付けていることは何か。
　⇒　事前に導入材を利用して，切断や切削を練習している。
・ソフトで設計した後に，３Ｄプリンターで作成することができるか。
　⇒　「Onshape」は３Ｄプリンターに対応しているので，作成することはできる。
・保存の変容が分からないということだが，教師がデータを見られる状態なのか。
　⇒　保存データの確認ができないので，今後の対応として，授業終わりの記録をスクリーンショットで記録させて，それをドキュメントに貼り付けまとめていくという形を取りたいと考えている。
・斜めの材料など表現しにくい材料の設計はできるか。
　⇒　表現しにくい材料の設計もできる。時間の都合で全体への説明ではなく個別対応した。

協議の柱及び協議概要

４人ずつ，４つのグループに分かれ，以下の２つのテーマで研究議論を行った。

①　「設計」について
　⇒　設計の場面で，「対話」を進めるための指導のコツやポイントは？
　・生徒同士のアドバイスは知識が少ないので難しい。また個人への訂正箇所の指摘も難しい。
　・改善点を出す対話には時間がかかる。会話だけでなく見ることも対話になる。
　・家庭で使用する作品だと条件が違うのでアドバイスがしづらい。学校の机の上で使用する作品など条件を同じにする。作品に値段をつけるという対話も面白い。
　・設計で対話をしても書き方の教え合いになってしまう。

②　「学習過程のつながり」について
　⇒　困っていることは？　指導のコツやポイントは？
　・評価活用の時間を充実させる。
　・基礎題材と応用題材を行い，同じような題材を二度繰りかえすことで，課題設定をして評価修正を繰り返すことができる。
　・評価修正を行うために，完成後に改善点をあげる形でもよい。各単元で時間が決まっているので，どこかで時間の調整が必要である。
　・設計において，エネルギー変換や生物育成では問題解決の課題設定が難しい。

まとめ概要

技術分野は１名配置の学校が多く，学校規模によっては技術・家庭で１名配置の学校も多くある中で，教員同士で情報の共有ができたことが大きな成果であった。今後も横のつながりを意識し，情報の共有することが大切である。また，一人一台端末が配布されたので，学習課題も新しいことを取り入れていくことが大切である。

本題材で，Chromebookで製図を行うことにより，正確で簡単な設計図を作成でき，修正も簡単に行えることで「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」につながっていると考えられる。生徒たちが課題解決に向けて没頭し，深い学びへとつながっているように思われる。学校での活動で実際に作ったものを家庭生活の中で活用することで，自己の課題が解決され，技術によってよりよい生活の構築が行われたことを生徒自身が感じることができた。

本題材を通して技術分野だけでなく，他の教科においてもICTの利用が広がっていくことが大切である。ただ端末を使うことが目的でなく，学習の手段として用いることで，生徒たちの学びが広がり，深まることが大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)　午後部
部 会 名	中学校　保健体育部会

神奈川県研究主題

資質・能力育成のための学習評価の充実（指導と評価の一体化）

テーマ

『　主体的に学習に取り組む態度をみとるための評価の工夫　』

提案概要

【はじめに】

昨年度より、新学習指導要領の実施に伴い、評価の観点が大きく変化した。「主体的に学習に取り組む態度」と前学習指導要領の「関心・意欲・態度」と何が違い、どのような評価を行ったら良いのか疑問に持つ声が多数上がっていた。そのようなことから、本地区で「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準についてアンケートをとったところ、学校ごとに様々な評価をしていることがわかった。同じ地区、同じ学校でも評価規準が違うことに課題を感じた。そこで、本研究では、以下のことを目的とした。

① 評価規準を学習指導要領の例示を参考に見取ることとし、どのような生徒をＡ以上の評価とするのか「キーワード」の共有

② 生徒の変容を見取るための、指導者のアプローチ方法の研究やＢ規準に満たない生徒に対してどのようなアプローチからＢ規準へ向上させるかの研究

主体的な学びをどう捉え、どのように評価していくかを本研究で共有し、信頼ある評価へ繋げていきたい。また、各学校の実態に応じて変化・対応できるように限定的な評価方法とならないように工夫をしておこなった。

【研究実践の概要】

① 評価規準・「キーワード」の研究

② 生徒へのアンケート

③ 研究授業実践（器械運動）
- 身体の動かし方を意識した指導方法
- 撮影した動画を活用した支援方法
- アドバイスカード・アウォード（認め合い）の活用

④ 振り返り

協議の柱及び協議概要

【協議の柱】「主体的に学習に取り組む態度の評価の見取り方の工夫について」

【形態】　４人組のグループ協議

【協議で出た内容】

Ａ：４観点の見取り方は３観点になっても変わらない。それぞれの学校の評価規準の共有。

Ｂ：学習カードの見取り方。小学校では学習カードを書かせるのは大変。主観的な見取りだけでは正しいのか不安。客観的に見取れるもの（提出物）も必要では。

Ｃ：全員を平等に見取ることは難しい。学習カードで補填は大事になる。ただ、低学年の児童には難しい。

Ｄ：毎授業の中で何を見取るかを決める単元の見通しが重要。技能の差をどう埋めるのか難しい。

Ｅ：まず見取ると言うことが難しい。また学習カードも能力に左右される。小学校低学年などは口

答でのやりとりも大事ではないか。
Ｆ：規準のＢとＣは区切りやすいがＡとＢの違いをどうつけるかが難しい。知識・技能、思考をある程度身につけさせないと主体性も上がってこない。
Ｇ：中学校では授業の中で生徒すべてを見取るのは難しい。授業風景は動画を撮って見直している先生もいるが難しい（時間的にも）。小学校では体育カードの使い方が難しい。技能はできていても書けていない子はどうしたらよいのか。
Ｈ：学校ごとで評価の付け方のばらつきが気になる。
Ｉ：Ａ規準の設け方として数値化しにくい規準である。Ｂ規準をめあてとし、すべてできていたらＡという付け方はどうか
Ｊ：変容を見取ることは大切。だが、保護者に数値で説明するのが難しい。
Ｋ：グループごとの動画を撮り話合いの様子を確認している。
Ｌ：認め合い活動は思考・判断・表現との兼ね合いも見ながらつけていっている。中学校ではどうしても進路に関わる成績になってしまうためそこが難しい。
Ｍ：ワークシートはそもそも授業内で書かせる時間が無い。見取るとしても全員を見取ることができない。必ず単元開始の際に評価の観点を生徒に伝えることが大事。
Ｎ：見取りが先生の主観にならないよう評価規準を明確にしておく必要がある。生徒の人間関係を考えたグループ作りも必要。
Ｏ：Ａの規準はＢ規準が単発ではなく持続してできているかでつける。

まとめ概要

提案者より

成果

・今までの授業を変えるということではなく、普段の授業の中に「意味づけ」「価値づけ」をすることが大切。

・この単元で「どのような主体性」を身につけさせたいかを明確にし、それを生徒に伝え、「価値づけ」することで、次第に自ら考えることやそれに伴った知識を習得しようとする「主体的に学習に取り組む態度」につなげられると考える。

・評価規準に「キーワード」を据えて明確化することで、授業内の観察から生徒の変容を見取ることは可能である。そのため、学習カードはあくまで補助資料として活用する。

課題

・一斉指導で、身体の動かし方やポイントを説明し、アドバイスや援助等の観察により見取ることとしたが、グループにより説明等に多くの時間を要する場面もあり、教師が評価したい場面で見取ることができないこともあった。

・学習指導要領の内容をしっかりと理解し、指導する内容を精選し、今まで以上に明確化していく必要がある。

助言者より

学習指導要領の改訂に伴い、評価の観点が「主体的に学習に取り組む態度」へと発展的に変更された。「粘り強さ」「自己調整」が何を示すのかの難しさ。また、数値で表せない（表しにくい）評価の仕方の難しさが「主体的に学習に取り組む態度」の評価をつける課題として挙げられる。

授業でやってきたものは変わらない。ただ、価値づけ、意味づけは重要になる。生徒に身に付けさせたい力を生徒に伝えることで活性化した活動となる。「目的・目標」のある活動、授業づくりを目指すために授業前の準備・評価規準の作成し「何ができるようになるのか」というゴールの姿を見定めておくことが重要である。

体育科では学習指導要領に例示が示されている。こうした資料を活かして学校の生徒の実態に合わせた評価を行う。ただ、学校内で評価のブレなどが出ないよう教員間で評価規準を共有することが信頼ある評価へとつながる。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　外国語部会

神奈川県研究主題

『資質・能力育成のための学習評価の充実（指導と評価の一体化）』

テーマ

『４技能５領域における観点別の指導と評価について～Listeningにおける実践～』

提案概要

外国語科においては４技能５領域ごとの指導と評価を実践すべく、授業と評価の改善を日々行っている。今回は「Listening（聞くこと）」に焦点を当て、指導と評価の実践を紹介した。以下、５点が実践の概要である。

① 生徒に単元計画を示し、単元の目標を伝えることで見通しをもたせる。
② 授業を全て英語で行う（オールイングリッシュ）ことで、日常的に英語に触れさせる。
③ 単元テストにおけるリスニングのテストで、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を一体的に見取ることを基本とし、正答には至らないが何を聞くべきなのか理解し、正答に近い解答をしたものを粘り強く取り組んでいるとみなし、「主体的に学習に取り組む態度」においてその取組を評価する。
④ 各技能における学習の取組方の振り返りをし、学習改善に生かす。
⑤ 授業アンケートをとり、授業改善や評価に生かす。

以上５点の実践により、生徒のリスニング力の向上、オールイングリッシュの授業への前向きな姿勢が育まれた。しかし一方で、生徒の取組方、成績のつけ方の部分で課題が残った。

質疑応答

Q：なぜ，リスニングテストの評価の仕方で「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価に差(例：思考・判断・表現⇒ B、主体的に学習に取り組む態度⇒ A)を作っているのか。同じ評価ではいけないのか。
A：正答まで至らなくても「正答となる英文の中のキーワードだけでも聞き取れた」ことを「英語の聞き方を少しでも身に付けることができた」と理解して、思考・判断・表現と主体的に学習に取り組む態度は異なる評価をつけた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱は『主にListeningにおいて主体的に学習に取り組む態度をどのように見取っているか』で、以下は協議で出た内容である。なお、この項目では知識・技能を、知、思考・判断・表現を思、主体的に学習に取り組む態度を主と表記する。
・リスニングで主を見取ったことはあまりなかった。
・主は学習の振り返りを書かせて評価している。そのときに知と思はAがついているのに，文章力に差があり、主だけBやCがついてしまうこともある。英語の力があるのに主が低いという評価をつける

ことに違和感がある。
・一部だけ聞き取れたことを評価してしまうと、粘り強く聞き取った結果なのか、聞こえてきた単語を適当に書いたのか判断するのが難しい。
・スピーチを生徒が発表し、それに対してのリスニングの方が評価できるのではないか。
・インタビューの応答で評価する。
・小学校では、振り返りに書いていることが実行できているか、スピーチメモを白い紙に書かせて、どのように学習が変容しているかを見取る。そのために、見取るための視点をしっかりと作っておく。
・正解の一部だけでも書けていれば、主がAという評価をしてしまうと、「何でもいいからとりあえず書いておけばいいや」という考えにならないかどうか不安が残る。
・リスニングは知があっての評価になるからこそ、思や主を見取るのが難しい。
・オールイングリッシュの授業をしていると、より注意して聞くようになるので良いと思った。
・毎日取り組んでいる英語の歌から問題を出題している。
・単元ごとの振り返りシートを書かせて評価しているが、国語力の差やこちら側の思惑を意図的に書くことのできる力が評価に反映される可能性もあり、単純に主を見取ることが難しい。
・単元のゴールに向けて、授業の中で練習する場を設け、自己評価させ、その変容を見取る。
・単元の目標をはじめに伝えることで、何を学ぶべきかが分かり、どのように学ぶかを見通すことができると思う。
・今回の提案での見取り方をぜひ取り入れてみたい。
・知C、思C、主Aもあり得る。意欲はあってもどうしても結果がついてこない生徒がいることも事実。
・記録に残す評価として見取る場合には、評価基準を明確に示したほうがよい。特に、複数で受け持つ場合にはしっかりとすりあわせを行う必要がある。

まとめ概要

生徒の主体的な学習改善につながる評価方法を模索していく上で、教師による指導改善はとても大切である。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価においては、教師が生徒の「主体的に取り組んだ部分」をしっかりと観察することが重要である。国立教育政策研究所による『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』には、『「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、基本的には「思考・判断・表現」と一体的に評価する』という記述がある。一方で、『ただし，生徒の特性や学習段階により、「主体的に学習に取り組む態度」が必ずしもコミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じた発話や筆記等に表れない場合もあるため、そのような段階にある生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の評価結果は、「思考・判断・表現」の評価結果と一致しない場合もある。「思考・判断・表現」と基本的には一体的に評価しつつ、言語活動への取組状況を観察しその結果を加味するということであり、生徒の態度を見取ることはこれまで同様重要である。』という記述と事例が掲載されている。この解説からも「一体的に評価する」ことを基本としつつも、必ずしも「主体的に学習に取り組む態度」の評価結果は、「思考・判断・表現」の評価結果と一致しない場合があることがわかる。

今回の提案におけるリスニングテストの評価方法は、生徒が主体的に取り組んだ部分を積極的に見取り評価し、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」のそれぞれで評価をつけるという実践であった。

今後ともその成果や、評価のあり方を検証し、生徒が主体的に自らの学習を改善していけるように、より良い指導方法・評価方法を検討していくことが肝要である。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　特別の教科　道徳　部会

神奈川県研究主題

『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』

テーマ

『　自尊感情を育む道徳　―共感・認め合い・共有体験を通して―　』

提案概要

実践校では、不登校生徒が全国平均に比べて多く、その原因に自尊感情の低さがあるのではないかと考え、令和三年度から「自尊感情を育む」というテーマのもと校内研究を行ってきた。生徒の主体性を引き出し、仲間と対話することで得られる「深い学び」は、生徒自身の実態把握とその課題に向き合うことなしには得られない。そこで、道徳授業において二十二の内容項目の内「19　生命の尊さ（D主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること）」を重点的に扱うことで、生徒自身の自尊感情を高める取組、授業実践を提案する。

〈取組の柱〉

① 生徒の実態把握にあたって、「SOBA-SET」(注１)を用いて、特に一見頑張っていて、成績が良かったり、部活動など活躍できる場所を持っていたりする生徒の中に、実際には自分自身に対する評価が低く、自信をもてない生徒がいることに注目した。

② 「生命の尊さ」という一つの内容項目を重点的に扱うことにあたって、実施の時期については、三年間を見越した全体計画に基づき、新クラスになり春の行事が終わった後、夏休み後の時期、年が明けた時期に設定した。いずれも登校渋り等、不安が出やすい時期となっている。

③ 教科書の教材だけでなく、校内で検討した自主教材も用いて、計６回、校長・教頭、養護教諭も含め、全校一丸となっての道徳授業を実施した。

(注１)　近藤卓教授（日本ウェルネススポーツ大学）考案の自尊感情を４つのタイプに分別する心理尺度である。自尊感情を、何ができるかに左右され、他者との比較による相対的な「社会的自尊感情（S）」と、何ができるかに左右されず、比較ではなく無条件かつ絶対的な「基本的自尊感情（B）」に分け、アンケート結果によってそれらの偏りを SB, Sb, sb, sB で表す。特に Sb は、外からは何事にも頑張り前向きな姿勢があるように見られるが、実際には無条件に自分を肯定することができないという側面を持っている。

質疑応答

Ｑ　SOBA-SET を実施する上で気をつけることは？

Ａ　生徒が本音を書かずに表面的なところで書いて済ませてしまう可能性がある。基本的には生徒の中にいる Sb を見分ける、気づくということが大切だと考えている。

Ｑ　全校一丸となって道徳に取り組むポイントは？

Ａ　校長も参加したということが一番のポイント。全員で取り組んでいく、という強い意志をもつことができた。

Q　「生命の尊重」という項目自体、なかなか取り上げるのが難しいが、自主教材はどのように探したのか。
A　校内の掲示物を利用するなど、生徒にとって身近なものから集めた。

協議の柱及び協議概要

①　評価することの難しさ
・本音を引き出せているのか、いいことを書いて終わりにしようとしてしまう生徒がいて、なかなか評価が難しい。評価が生徒の本音を引き出す弊害になることもあるのではないか。
・生徒自身が自分の書いたものを積み重ねていくことが大切。
・本音を引き出すために必要な時間があり、新学期早々は難しい。「きちんと聞く、発言することに責任をもつ」といった授業規律を通じて、安心して話せる空気が生まれる。
・生徒が書いたものに対して、教師がコメントをつけることの是非。否定されてしまえば、生徒は本音を書かなくなってしまうのではないか。
・フィードバックの仕方として、書いたものを、帰りのホームルームで紹介したり、学級便りで紹介したりしている。
・スプレッドシートで意見を共有させている。他の生徒の書いたものに上書きできてしまうというデメリットがあり、落ち着いた環境でないと難しいかもしれない。
・振り返りを書いたら学習が終わる、ということになってしまうこともある。他の人に見られるとなると、見られても平気なものを書こうとして本音にならない。なかなか深まるというところまでいかない。
②　「生命の尊さ」という内容項目を扱う上での課題
・教材が「生きる」という内容なら良いが、「死」を扱っている場合は難しく、ローテーション道徳で気軽に扱える内容ではないと感じる。
・生徒の家庭環境によっては扱うのが難しく、その年にできなくても３年間という長い期間で行うことが大切。やらないということでよしとするのは違う。
・配慮が必要な生徒がいる場合、事前に保護者に教材を見せるなどして、実施することが生徒の負担にならないかを考える必要がある。
・教員自身が、多様化している生徒の環境に気後れしてしまっている部分もあるのではないかと感じる。
・教員ではなく、「命の授業」として外部講師による講演や、カウンセラーからの企画を通して行うという方法でもよいと思う。

まとめ概要

不登校の生徒が多いという実態を前に、管理職を含む学校全体で道徳授業に取り組んだことは大きい。また、生徒を見取ることを、一人ひとりがバラバラに行うのではなく、SOBA-SET という方法を用いて、外からは見えづらい無気力や不安を抱えている生徒を発見し、みんなで「ありのままの自分を大切にしよう」という自尊感情を育てる視点を持ったことが、力強い道徳授業実践に繋がった。生徒にとっても校内アンケートの結果、最も印象に残った道徳授業の内容項目は「生命の尊さ」になるなど、そのメッセージは伝わっていると考えられる。もちろん、道徳授業だけでなく、学級や教科での関わりなどが生徒の意識の変容に欠かせないのは言うまでもないが、ダイレクトに「自分の命は大切なもの」と感じられる道徳授業に、臆せず取り組むこともまた重要である。

概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)
部　会　名	中学校　総合的な学習の時間部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

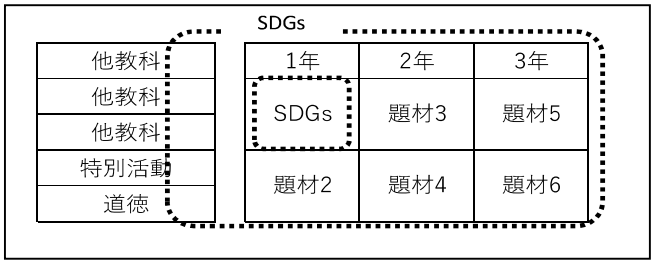
テーマ

『　SDGsを柱とした総合的な学習の時間のカリキュラム編成　』

提案概要

・新学習指導要領が全面実施された令和３年４月に学校教育目標を変更し「自立・共生・貢献～自ら生きる・共に生きる・社会に生きる」と設定をした。学習指導要領においては、「学校教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力を示すこと」が明示されている。しかし、多くの学校が学年ごとの学習設定で、３年間を見通したねらいが希薄になっているのが現状である。本校も学校全体で統一感のあるカリキュラム編成となっておらず、総合的な学習の時間を通して育成したい生徒の資質・能力が不明確になり、３年間を通した学習の積み重ねも不十分であった。また、生徒の実態として、素直で落ち着いている反面、自ら課題を見つけたり、設定したりすることが不得手で、自らの手で解決しようとする姿勢も不十分なため、主体性を伸ばす必要があると捉えていた。そこで、近年注目されているSDGsに着目した。SDGsは持続可能な開発目標のことであり、求められていることは全教科で取り組むことができ、課題解決的な学習がしやすく、SDGsの視点を取り入れることで学習の幅も広がると考えた。また、学習指導要領解説において「一人ひとりが持続可能な社会の担い手となること」が示されていることから、今回の実践では、学校教育目標を踏まえ、SDGsを柱とした総合的な学習の時間の全体計画の整理を行い、３年間を通して学習を積み重ねていくカリキュラム編成を検討することとした。

〇実践の概要　　今回の研究にあたり、本校におけるSDGs学習は次のように考えた。



これは、１年次にSDGsの基礎学習を行い、その後はそれぞれの単元のなかでSDGsの視点を取り入れていくことを表している。また、総合的な学習の時間だけでなく、各教科、特別活動、道徳、その他の教育活動において総合的な学習の時間やSDGsとの関わりを検討した。

〇実践の具体・・・今後(R４年度以降)の取り組み案

１年 「三浦をもっと知る」	２年 「三浦をもっともっと良くする」	３年 「三浦の未来を考える」
情報教育 ① SDGsの視点 校外学習 防災学習	情報教育 ② 中学校を良くする 宿泊学習 ③ 三浦の産業を良くする 進路学習	情報教育 ④ 自由研究 「三浦の未来を考える」 修学旅行 進路学習 卒業期学習

① SDGsの視点

SDGsの考え方を知ることで、SDGsの視点(経済・環境・社会)をもって諸課題を解決していこうとする基本的な姿勢を身に付ける。

② 中学校をもっと良くする

学校生活での課題や不満、不安に目を向け、問題の解決に取り組む。主体的に取り組み、自分で考え実行したことでより良くなっているという充足感を味わう。グループでの協働を通して、互いのよさを生かし、また自己のよさに気がつき、自己肯定感へとつなげる。まとめ・発表を行い他グループの実践を知ることでさらに視野を広げる。

③ 三浦の産業を良くする(職場体験)
　本市にある企業での職場体験やインタビューをとおして、現在抱えている問題や課題を見つけ、それに対する解決策や、100年先も持続可能にするための提案をおこなう。
④ 自由研究「三浦の未来を考える」
　三浦市を自分の手でより良くしていくための課題を見つけ、解決のための研究、実践を個人で行う。まとめ・発表の仕方については検討中。下級生へ向けて、保護者・地域の方へ向けて、市役所の方々へ向けて等。

〇成果と課題

【成果】研究組織を立ち上げたことで、定期的に総合的な学習の時間について議論することができ、学校教育目標や総合的な学習の時間をとおして育成したい生徒の資質・能力を意識し、整理していくことができた。総合的な学習の時間についての方向性や育成したい生徒の資質・能力が整理できたことで、全体計画を整理し作成することができた。「SDGs」という具体的なキーワードがあることで、教員間で話題にしやすく、気軽に相談し合えるようになった。また、「SDGs」を学習することが目的ではなく、「SDGsの視点」で学習をするという共通理解が全体ではかれた。「SDGs」を通して研究をすすめていくと、「みうら学・海洋教育」に関連付けられるのではないかという意見が多く出た。今後は「地域・三浦」や「みうら学・海洋教育」とも関連付けて取り組むことも検討していきたい。

【課題】３年間の実践と検証がまだできていないことや、各行事と「SDGsの視点」との関連性や整理が不十分であることから、継続して研究を進めていくことが必要である。さらによりよいものとなるように学校全体で取り組んでいきたい。

質疑応答

・「みうら学・海洋教育」とは何か。
　→「三浦の海は世界一」東京大学三崎臨海実験所と一緒になり、三浦を好きになる郷土教育の必要性を感じた人々が立ち上げ、若い先生方に三浦の良さを知ってもらうため研究や実践するもの。
・SDGsの視点は大切だが、グローバルな現代では自分の地域だけを知るだけでは不十分ではないか。
　→確かに大きな世界で活躍することも大切だが、地元を大切にいつ戻っても大切にしてほしい。
・SDGsの17の目標のうち、何かに絞っているのか。→迷っている。子どもの意思を尊重したい。

協議の柱及び協議概要

協議の柱＝（１）各校における地域や学校の特色を生かした学習の情報交換
・鎌倉散策・江の島フィールドワーク・・・・防災・自然環境学習
・海に近い学校は防災を意識した学習に取り組んでいる。
・「湘南」「職業」などテーマを柱として３年間で学習する。
・地域を理解していないと指導できない。今回の実践は大いに参考になった。

協議の柱＝（２）各校の生徒自身による課題設定についての取り組み
・生徒自らが課題を設定することは、なかなか難しい。ヒントをかなりあげている。
・課題＝テーマを６つのカテゴリーから生徒に選択させる。
・自治体のサポートセンターでテーマに沿った人を紹介してもらい、テーマ設定に有効活用している。
・マインド(イメージ)マップなどの思考ツールを利用して、イメージを持たせ、「テーマ」を設定させ、仮説を立てさせる。現地で実際に確認し、その後仮説と比較検討させる。

まとめ概要

・本提案では、学習指導要領解説にある「学校の教育目標を教育課程に反映し具現化していくに当たっては，これまで以上に総合的な学習の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに，各教科等との関わりを意識しながら，学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うことが求められる。」ことを正に自分事として実践したものである。カリキュラム自体は、これから改善を重ねていくものであるが、SDGsの視点をもつことによって、課題設定や課題解決の道筋が明確になっている。教科の横断化も促すこともできる。また、三浦の地域財産である「みうら学・海洋教育」との連携は、地域に生き、育つ子どもたちに大きな影響を与えるものと考える。短時間であったが、他市の学校の状況を情報交換することができ、それぞれの学校の工夫やその地域に沿った学習活動など参考になる事が多く、有意義な時間となった。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	中学校　特別活動部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

テーマ

『望ましい集団を通して、生徒一人ひとりの自主性・実践的な態度を育む活動』

提案概要

本提案は、『望ましい集団を通して、生徒一人ひとりの自主性・実践的な態度を育む活動』を主題とした生徒会活動の取組であり、学習指導要領第５章の「第１　特別活動の目標」と「第２〔生徒会活動〕２内容」に関連付けられている。

生徒たちは素直で友人や周りの人に優しく、協力的な面を持つ子が多い。それが故、自主性を持って行動する力に課題があると感じていた。「言われて取り組める」から「自主性を持って取り組める」生徒を育てるために、学校グランドデザインの〝重点的に育成を目指す資質・能力〟として「自ら考え、見通しをもって行動し、社会の中で生き抜く力」を設定し、生徒たち自身の自治的活動を促すことからスタートすることにした。そのために「課題設定・発見」⇒「話合い」⇒「実践」の手順を踏み、ツールとしてICTの活用を取り入れた。

以前より市内の中学校では、生徒会活動の一環として１年に１回「連合生徒会」を実施してきた。各中学校の生徒会の生徒同士が自校の特長や良さ、実践している取り組みを発表し合うことで互いの学校の良さを認め合い、自校での取組の発展に生かしていく、ということを目的としている。コロナ禍において合同で集まることが叶わず、他校との情報交換や連携を図る手段はないかと考えたところ、iPad、オンラインミーティングアプリ「Zoom」を活用した「オンライン連合生徒会」を実践することにした。オンラインという特性を生かし、頻度を上げ月に１～２回開催し事前レポートと参加後のアンケートを実施した。またオンラインで行うことにより、コロナ禍で開催できなかった生徒会行事を行うヒントを見つけることができるのではないか、という目的をもとに連合生徒会に参加するようにした。具体的な活動としては各校の生徒の自治的な活動を目標とし、各校で取り組むことのできる共通した活動を立案させた。例えば、「挨拶について」各校でアンケートをとり、うまくいっていること、うまくいっていないこと、それぞれの学校にどんな特徴があるか分析し意見交換をした。

これらの活動により、感染予防対策で中止になっていた校内の学校行事を生徒たちが主体的にオンラインやICTを活用して企画できるように変化したり、（例：生徒総会、朝会、部活動オリエンテーションなど）学校生活のルールについて生徒全員が答えられるように生徒会執行部の生徒がGoogle formを利用してアンケートを作成したりすることができるようになった。また、生徒会本部だけでなく他の委員会もオンラインを活かした活動を自主的に考えるようになった。

〈実践の成果〉

- 年に１度行ってきた連合生徒会の回数を増やし、オンラインという形ではあるが月に１度継続的に行うことができた。継続的に行ってきたことで各校の生徒たちはお互いを身近に感じ、意見を活発に交換するように変化してきたように感じる。
- 他校と継続的にコミュニケーションをとることによって他校の取り組みを自校に取り入れ、新たな活動に挑戦するきっかけとなった。
- 自校の課題解決のヒントを得ることができた。
- オンラインで活動することができる。という意識づけができた。
- 生徒同士をつなげる　⇒　生徒による課題発見・自治的な実践につながった。

〈今後の課題〉
・オンライン連合生徒会を定期的に開催してきたが、学校間のスケジュールの調整が時期によっては非常に困難である。
・生徒達を指導する教員側にも負担感があった。
・生徒達も準備に追われてしまい、余裕がなく進行の仕方が形式的になってしまった。
・生徒達にとって有用な活動をどのように有用なまま継続していくか。ということが大きな課題である。
・オンラインだけではやはり本当のコミュニケーションにはなり得ない。

質疑応答概要

Ｑ１：生徒会本部と部活動の両立はどのようにしているか？
Ａ１：活動は週１回。なかなか難しいが、どちらも頑張れるスーパーになろう！という指導のもと忙しさは生徒それぞれなので当番制にするなど、お互いをカバーし合う工夫をしている。
Ｑ２：オンラインにはない対面の良さを生徒たちも指摘しているが、対面に戻すタイミングや割合はどう考えているか？
Ａ２：生徒たちも改めて対面の良さを実感しているので戻していきたいが、世間の壁が高い。
Ｑ３：生徒会本部の活動は活発になっているが、生徒会で出た意見を学級会等で揉んでいるのか？
Ａ３：基本的には生徒会本部で出た意見を下す。という形。中央委員で意見の集約は行っているが、それをまた学級に返して話合いの時間はとれていない。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱】
「生徒一人ひとりの自主性、実践的な態度を育むICTの活用」
【協議内容】
① 研究テーマに沿ったICTの活用事例
・学校行事、生徒会行事、集会等をZoomなど、オンラインで行う。
・部活動・クラブ活動見学ができないため、活動の様子を動画撮影。
・学活の時間で「GIGA成功への30チャレンジ」を学年で取り組んだ。
・小中連携で、児童会と生徒会の交流、中学校訪問のオンライン化。
② 研究テーマ以外の教育活動における活用事例やアイディア
・授業内でGoogle meetやクラスルーム、ロイロノートの活用。
・生活アンケート等をGoogle form を使って実施。
③ そのほか、意見や感想
・ICTを活用できる生徒（必要かどうか判断する力）を育てることも大事。

まとめ概要

今回の提案で生徒自身の自主性を育て、自治的な活動をさせることがやはり大事であるということを改めて認識することができた。その仕掛けがICTの活用ということであったが、生徒からも「オンラインだけでは本当のコミュニケーションにはなり得ない。」という意見が出た。顔を見て、生の声を聴き、表情をうかがうなど微妙なニュアンスはオンラインではなかなか伝わりづらい。ただ、時間や場所の制約を受けづらく、気軽に参加でき、人の意見に触れやすいなど、オンラインならではの利点もたくさんある。従来の活動に加え、ICTを上手に活用し「望ましい集団」をつくり「生徒の自主性・実践的な態度」を育んでいくことが大切である。

概　要　報　告

実施日	８月４日（木）
部会名	中学校　特別支援教育部会

神奈川県研究主題　『個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導法の工夫』

テーマ　「不安感を取り除き自信をつけるための自立活動」

提案概要

（１）提案テーマ設定の理由

特別支援学級に在籍する生徒のうち不登校及び不登校傾向のある生徒に着目し、不登校及び不登校傾向にある生徒へ特別支援学級ならではの対応を実践した。彼ら不登校及び不登校傾向のある生徒の抱える問題は様々であり、特別支援学級に在籍する事由も異なっている。登校することで、多くの友人や大人と関わり、自ら成長していくことを願って、自立活動の授業を試みた。自立活動の目標は、『特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第７章 自立活動』に明記され、「個々の児童又は生徒が自立を目指し，障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識，技能，態度及び習慣を養い，もって心身の調和的発達の基盤を培う。」とある。

生徒一人ひとりに、寄り添う指導だけでは解決しない事があった。この経験から、生徒たち自身が人との触れ合いを通して、喜びを実感し、体験活動を通した学びと成功体験を味わい、さらに失敗体験を通して自ら考え乗り越えていく力を身につけて欲しいと願い、自立活動の授業を中心に展開した。

（２）具体的な提案内容

① 「自立活動実態シート」の作成

「不安感」をきっかけとして不登校及び不登校傾向になっている生徒３名への支援を行った。自立活動実態シートを作成し、全体の年間計画や個別支援計画に反映させた。『特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 第７章 自立活動』を参考に、３名の生徒の実態を踏まえ、自立活動の目標と内容（６区分 27 項目）を設定した。

② 授業の具体

生徒３名の「不安感」を取り除くため、生徒自ら「選択」する場面を設定することで、内在する精神的な「不安感」が軽減するのではないかと考えた。そこで、自立活動を中心に行う「活動の時間」を週４時間ほど設定し「１．畑仕事を中心に作業をすること」、「２．生徒たちが自己選択すること」、「３．責任をもって取り組むこと」を目標に取り組んできた。

自分で育てる野菜を決めたり、育て方について調べたりする中で、コミュニケーションの機会が増えていった。害虫の被害にショックを受けたものの、野菜を守るために虫が嫌がる成分を調べ、オリジナルの薬品をつくって乗り越えることができた。作物が実り、収穫ができたことは大きな達成感となり、苦手な野菜を食べようとする意欲をもつこともできた。しかし、欠席の多かった生徒は、活動の予定が立てられず、興味を持続することが難しかった。

③ 成果と課題

この活動を通して、実体験から生徒たちが学ぶことや自ら選択し、決定していくことの重要性を実感することができた。

「活動の時間」を通して、自ら目標をもち、自ら学ぶことで成長した生徒１名は、課題を解決していく見通しをもてるようになり、「不安感」を取り除くことにつながったと考えられる。現在では交流級の授業にも参加し、自ら課題を見つけ取り組んでいる。他の２名の生徒は大きな成

果が見られなかったが特性にあった学習課題を見直し、振り返ることができた。実践を通し、個々の特性にあった学習活動や計画を見直し、つまり PDCA サイクルの見直しの必要性を痛感した。小学校からの引き継ぎ資料や現在に至る観察などを踏まえ、新たなアセスメントの作成を行い、新たな「自立活動実態シート」を練ることとなった。

協議の柱及び協議概要

グループ協議（約 20 グループ）は、どこも活発に協議をしていた。（内容を一部紹介）

① 小中学校間の情報の引き継ぎ、入学後の連携の方法

・中学校から質問事項をリストアップしてもらい、小学校で引き継ぎを行っている。
（身体面・健康面・家庭環境・生育歴・保護者対応などの項目）
・小学校で作成した個別指導目標に基づいて、引き継ぎが行われている。
・中学校で１日体験入学を実施している。（小学５・６年生、年に２回程）
・中学校入学前に保護者と面談を実施している。
・小学校で使用していた机や椅子の引き継ぎが行われている。
・小中学校間で互いに授業参観を行っている。
・中学教員が訪問時に行った小学生への「中学校に行けるようにｏｏをしよう。」という声かけを小学生が励みにしていた。
・通常級から入学してくる場合は、情報量が乏しいことがある。
・小学６年間を通した情報が乏しくなる傾向がある（低学年の頃の様子）。
・不登校生徒への対応で「支援の時間」が時間割に組み込まれている。

② 効果的に引き継ぎや連携を行うための工夫

・支援コーディネーターが改めて引き継ぎを行っている。（巡回相談に関わっている児童を把握している。）
・オンラインの活用をしている。
・外部機関とのケース会議（児童相談所や医療機関、SSW など）を行っている。
・地域で支援シートを統一している。
・保護者との面談などを学期に数回行い、登校時や下校時など保護者と会話をすることで新たな情報を得る。生徒や保護者と気軽に話せる関係作りが必要である。
・不登校生徒への対応は、家庭訪問や電話連絡などを通じて、学校の様子や家庭での過ごし方などの情報を得ることができる。

まとめ概要

・個々の目標を明確にして、成長の過程がわかりやすい野菜を自己選択しながら、育てていくという活動は効果的だった。やりがいをもち、成長を願う気持ちから、調べ学習や栽培の工夫をしようとする意欲が高まった。成功や失敗した体験は、自立にもつながるだろう。

・令和３年度の文部科学省の調査で「交流及び共同学習」や「自立活動」について課題が指摘された。「同じ場で学ぶこと」のみに重点を置くのではなく、個の指導目標や内容、方法を明確にすることが大切である。また、特別支援教育の土台ともいえる「自立活動」については、児童生徒の実態に合ったカリキュラムを設定し、積極的に実践して欲しい。

・児童生徒や保護者は、新しい環境への期待と不安を抱えている。担任や学校が変わっても適切な指導、必要な支援が受けられるように円滑に引き継ぎ、教育支援が「点」だけではなく、一連の「線」として、また、関係機関とも連携して「面」となっていくことを目指していきたい。